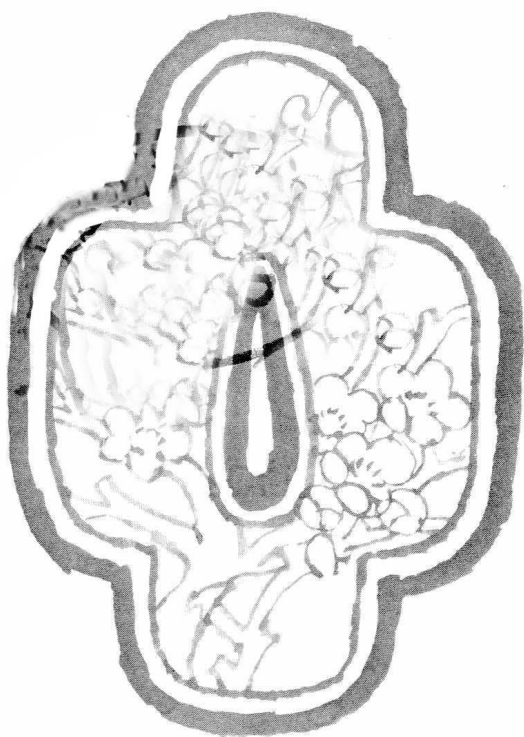




女 人 武 蔵

川口松太郎



講談社

女人武蔵

昭和四十六年四月二十日 第一刷発行

著者 川口松太郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二番

郵便番号 一一二

電話 東京(九四五)一一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 有限会社中沢製本

定価 五九〇円

© Matsutaro Kawaguchi 1957 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093 - 139441 - 2253 (0)

目次

聚楽落ち	5
志摩春秋	32
関ヶ原前後	60
怪、美少女	77
波瀾青春	109
大阪冬の陣	140
大阪夏の陣	190
鈴ふたたび	263
水や空	293
会い会わず	320
帰去来	360
無常迅速	401

装
幀
岩
田
専
太
郎

女
人
武
藏

聚 楽 落 ち

宏莊華麗な聚楽第の大建築が、嘘のように静まり返って、人の姿の見えぬばかりか、物音一つ聞えない。

金色に輝く障壁の美しさが、むなしく闇に消え込んで、人影のなさに救いようがなかった。

美しければ美しいほど、壮麗であればあるほど、不気味さは深く、三層の寄せ棟が、不吉な前途を暗示するかのようになっている。高欄に張った金銀の美しさも、何処へ消えてしまったのか、今はただ、黒々と夜空を貫いて立っている。

豊太閤が、全盛期の精力を傾け、豪奢をきわめて造りあげた大邸宅に、人の姿がなくなろうとは、誰が想像したであろう。

秀吉の住んでいた頃は、天下の中心で諸大名の詰所は、日夜を分たぬ人出入りであったが、秀次に譲ったあとは、邸内の様相が一変した。

秀吉は茶人で、風雅な好みも持っているが、秀次にはそれがない。

武骨一辺で、日常の挙措も荒々しく、聚楽第の華麗さとは相容れぬ性格だ。

「あんなお人ではなかったのに、何時の間にか、荒い御氣性になられました」

と、晴子は今夜も泣いている。

西御殿の一室には、ほそぼそと灯がともし、今出川晴子と白井民部とが座っていた。泣いても悔んでも、帰らぬ最後が来てしまった。

民部の小姓も、晴子の侍女も、姿を消し、次部屋には老女がひとり控えている。

「殿は、そのまま高野山にいらっしゃるのですか」

やっと泣きやんで晴子はいった。

「何事も判りませぬ」

民部は首をふった。全員外出を禁じられたので、安否の手がかりが掴めない。

西御殿の女部屋も脂粉の香りが消えてしまった。

「殿下はなぜ、関白が憎いのでしょうか」

と、声を高くしても、

「判りませぬ」

と、民部は首をふるのみだ。

「あなたが判らなくて誰が判るのです。太閤も関白も、あなたが一ばんよく知っているではありませんか」

と、声が更に高くなった。あたりが静かなので、高くいうと、部屋の外へも響いて行く。

西御殿には晴子を筆頭に三十四人の妻妾がいた。

三十余人の女を持つ乱倫さが、秀吉を怒らせる理由にもなっている。

今出川晴子を妻にした事も秀吉は認めていない。妻とは名ばかりで、公儀には披露もせず、披露されぬ理由も明らかだ。

右大臣今出川晴季の長女で、一度は他家へ嫁し、美屋という娘まである出戻り女。

秀次より三歳も年上だ。太閤の承知する筈がなく、非公認のまま正夫人の形だけがととのっている。

「御家老様」

と、襖を細めにあげた老女が、

「御奉行の前田様がお見えでございます」

と、冷たくいった。

奉行と聞くと、晴子はびっくりとしたが、民部の面は変らなかつた。

秀次不在の聚楽第は、京奉行の前田玄以が警戒警備に当たっている。東西八門はもとより、無数のくぐり門にも警固がつき、人の出入りを見張っている。

「奉行自身に來たのであろうか、この夜中に」

と、うすい灯の下に、晴子の目が光った。

「殿下のお達しがあったのかも知れませんが」

と、民部は腰を浮かした。

塗り廊下が深夜同様に暗い。他の女部屋と区別するために、柱を黒く塗ったのも、不吉の前兆になった。

老女のついて来る姿を、見て見ぬふりに、叱りはしなかつた。

「吉事でございますように、吉事でございますように」

と、ひとり言をいながらついて来る。

夜中奉行の出張を吉事であれと念じているのだ。

「駄目だ。吉事の筈がない」

と、民部はつぶやく。不祥事の重なる関白に吉報のめぐる筈はない。繰り返した苦渋の諫言が一つも役に立っていない。泣くにも泣けない心持だ。

本殿への渡殿へかかると、

「民部か」

と、呼ぶ声、

「常陸か」

と、すぐ応じた。木村常陸介と熊谷大膳と白井民部の三人が、関白の家老で、太閤の目付役だった。

「関白に落度があればそちたちの罪と思え」

と、数年前の大阪城で三人は秀吉に念を押されている。秀次に失態があれば許さぬという意味だったが、太閤の選んだ家老も役に立たず、目にあまる非行の最後が来てしまった。

「腹を切る日が来たようだな」

並んで、常陸はいった。

「切りたくともまだ切れぬ」

と、民部は首を垂れたままだ。切らねばならぬ日の来る事も判っているし、切る覚悟もついている。

「奉行の夜中出張は凶事であろう。御赦免は望まれず、無慈悲な宣告に違いない」

「無慈悲な宣告！」

と、常陸もうなずく。立腹した時の秀吉の残虐さを知っているからだ。

「然し高野山の淨地、青巖寺中にての御処刑はあるまい。万に一つの僥倖は木食上人の助命だ」

「それとても万に一つ、万に一つ」

二人は大廊下へかかった。

残存家臣が控えの間にかたまっているが、どの顔も生色はない。主人の生死を氣遣うのではなく、一身の安否を思う面だ。

「お奉行は？」

「お玄関の白砂にいらっしやいます」

「なに、砂の上に」

と、常陸は色を変えた。聚楽第の大玄関には、明石から取り寄せた白砂に、鞍馬の飛石が行儀よく並んでいる。前田奉行は玄関を上らず、砂の上に立っていた。

「やっぱり駄目だ」

常陸も民部もがくりとした。不吉を伝える使者は、式台を上らぬ古式だった。

今までの玄関は、白砂の上に塵一つとどめず、すがすがしく清めであったのに、今夜はまるで違っている。篝火がばちばちとはぜて燃え、醜い灰が落ち散っている。

心ない仕打ちを民部は悲しく見た。

裁く者と、裁かれる者の差異を、見せつけられているようだ。

常陸と民部がうずくまると、

「大膳はどうした？」

と、奉行が訊いた。三家老の一人欠員が氣に入らぬらしい。「心氣すぐれず、ふせり居りまするゆえ、お許し頂きとうございます」

と、常陸がいった。それを聞くと玄以は床几を立った。二人の顔を見較べ、家臣たちにも目を走らせ、

「前関白は、高野山青巖寺にて御自害なされた。山岡主計頭、不破万作、山田三十郎、玄隆西堂、雀部淡路守の五人は主君を追って死んだ」

と、玄以の声が水のように。秀次に従う侍臣は十二人であったが、追腹を切ったのは五人で、あとの七人の名はいわない。

来るものがついに来てしまった。万一の僥倖を頼んだのも無駄だった。木食応其も、秀吉の不興を恐れて、関白の助命をしない。

「女たちは、身を慎んで後命を待て。三家老以下家臣たちもそのまま」

と、奉行の声はまだ冷たい。

後命を待つまでもなく、処刑は知れている。うしろに並ぶ家臣たちに、幾分の動揺は感じられたが、

「これまでは役目、これからは」

と、玄以は深く腰を折って、

「心中お察し申す」

と、やや温かくいった。

「殿下のお怒りはきびしく、お取りなしの致しようがなかった。御立腹の原因は理由不明の禁裏献金で、お上御一人にとどまらず、良仁親王、智仁親王、新上東門院にも、殿下のお許しを受けずして、多額の白銀を献じたのがお気にさわったと思う。朝廷にお味方申して……」

「前田様」

民部は顔を上げた。朝廷献金の弁解をしようと思ったが、玄以は聞かなかった。

「判って居る。前関白に御叛意のないことも判ってはいるが、一たん思い込むとお許しにならぬ太閤の御気性は、二人とも知って居よう」

と、叱るようにいったあと、

「気の毒であった」

と、頭を下げた。

玄以は経緯を見通している。

許しを得て置けば何のこともない禁裏献金で、今回が初めてではなし、従来にもしばしばあったことで、今更許可を得るまでもないと思ったのが、間違いだった。

「諸門の固めは引き続き奉行が責めを負う。心静かに後命をお待ちなされい」

と、いい置くと、くると背をむけ、篝火の映える白砂を踏んで去って行った。

常陸介も民部も見送って立たなかった。

とうとう最後が来てしまった。ざわざわ騒ぎ出す家臣たちへ、「静かにせい」と、叱ったが、声にも力はなかった。

家臣たちはめいめいの部屋部屋へ散って行き、二人はまだそこに座っていた。

腹を切る日が漸く来たのだ。関白が高野山へ追われた日から予感があった。今は却って、落ちて着けたように安堵の色が浮く。

常陸介も同じだった。うなずき合って立ち上ると、大廊下を引返して、庭へ下りた。そこから半町ほどの西北隅に、別棟の長屋があり、聚楽第勤務者の屋敷が身分に応じて並んでいる。

東は大宮通り、西は千本通り、南は丸太町、北は一条通り、東西四町南北七町の大邸宅が、死の淵に沈んでいる。

長屋門をくぐると、最初の構えが民部の屋敷だ。白井、木村、熊谷と、三家老の屋敷が順に並んでいて、その外れに、一条通りへ出られるくぐり門があり、その門も閉めきられて、奉行の警固がついている。

「お帰りなさいまし」

暗い式台に手をついたのは、妻の三保だ。

妻ひとりでは誰もいない。従者も足軽も、女たちまでが姿をくらましてしまった。

士分以下の軽輩小者は奉行役人も棄てている。

民部は自室へ入った。

拝領の、唐物絨緞じゅうたんを敷きつめた部屋に、紫檀の小机が置かれ、その上に金銀の鈴が乗せてある。

その鈴も拝領品だ。

小机の前へ座ると、

「お便りがございましたか」

と、三保が手をついていった。

秀次が高野山へ入ったのは七月の十日。

そして今日が十七日。

「御自害あそばされた」

民部はびたりといった。

三保の面がびくりと動く。動いただけで表情は変わらない。白

蠟のように、白く固く、冷ややかな顔だ。

それっきり何もいわず、二人とも黙った。

民部は次の言葉に迷い、三保は良人の言葉を待っている。いい出さなければ解決はつかず、いい出し方がむずかしい。

「酒を貰おう」

目をつぶっていった。

なるだけ妻の顔を見まいとしている。

三保を去らしてから考えようと思ひ、三保も、支度しながら身の処し方を考えようとした。

塗り膳に、塗り盃と、冷酒をのせて運んだ。

手酌で、盃を満たして、

「体に異状はないか」

「はい」

ためらわずにうなずく。

最後の場所へ突き当る思いだ。

民部は酒を含んだ。酒は苦かった。

「改めて訊く。腹の子は、殿のお胤に相違ないか」

苦い酒をかみしめるような声だ。

いわねばならぬ声がやっと出たのだ。

「はい」

それにも躊躇はなかった。夫婦の上に背負わされた暗さは、今年の春から始まっている。

民部は盃を三保に渡した。三保は飲む真似をしてすぐ返した。

「繰り返して訊く。殿のお胤に違いないのだな」

今度は返事がなかった。裁断を待つ罪人のように首を垂れている。うなずいているのと同じだ。もういう事はない。

「雀部淡路たち五人が追腹を切った。今出川様他女人たちには、重ねて謹慎の申し渡しではあったが、もとより、御無事にはすむまい。五人のお子も死罪と思う」

秀次には五人の子があった。日比野下野守の娘おわこと子の産んだ仙千代、山口将監の娘辰の生んだ百丸、北野天満宮松梅院の娘きさこ佐子の産んだ十丸、竹中与右衛門の娘千屋ちやの産んだ十一丸の四人に、女子が一人。

関白に任ぜられたのは天正十九年十二月で二十四歳、自害した一昨日は文禄四年七月十五日の二十八歳、在位僅かに四年。

たった四年間に三十四人の女を愛し、五人の子供を産ましている。人臣の最高位に昇りながらこの生活は、非難されてもやむを得ぬ不倫さだ。若い関白の奔放な熱情は、正式な妻妾のみでなく、目にとまる家臣の女子にも、不貞な迫^せ好^{ごう}が少なくなかった。

三保もその犠牲者だ。

民部が在番の留守宅へ、不意につかつか入って来て、驚く三保を抱きすくめて、一夜の嵐に散らしてしまった。

魔物の走り去って行ったような悪夢だった。

不意のお成りに驚いて、狼狽している三保を抱きすくめ、慄えている一瞬の——のちに思い返しても、思い出せぬほど、短い瞬間の出来事だった。

「五人のお子の亡きあと、この世に残り得る血脈は、三保の腹にやどったお一人だけだ」

民部の声は静かだった。

妻の体内に、主人の子が宿っている。かつては妻であったが、今は妻と思えない。関白秀次の預り人で、一人残った血脈を、地上へとどめる貴重な体だ。

「殿の子のやどったことは誰も知らぬ。今宵中に聚楽第を抜け、他国へ行って産んでくれ。誰にも気づかれず、誰にも知らせずに」

声は冷たくなるばかりだ。

妻の腹に宿る、他人の子の無事を祈る愚かしさが笑えない。

三保は石のように黙っている。首を垂れて残酷な運命に耐え

ている。良人の声が責めるように響いても、罪の意識は起らない。

不運だったとは思うが、悪かったとは思えない。

激しい嵐が、花を吹き折って去ったように、降って湧いた悪夢なのだ。

民部もそれは知っている。罪のないことが判っているだけに悲しみは深い。が、その悲しみにも最後が来た。

「自分も関白のあとを追う身になろう。時を置いてはならぬ。今宵のうちに去れ」

妻を無事な場所へ、去らせる仕事だけが残ってしまった。

が、去らせる前に、一言だけ聞きたかった。

三保が、関白を愛したかどうか。主君の迫好を、許して受け入れる心があったか、なかったか。

聞きたいとは思っても、口へは出せなかった。

男の未練かも知れない。

また、手酌で冷酒を注いだ。

困難なのは聚楽第を出て行くことだが、下人たちは四散している。

警戒武士も深くは咎^{とが}めず、軽輩の四散は当然のことと見ている。

民部にも三保にもそれが仕合せになった。軽輩に身を落せば、逃れ出ることが出来そうだ。

三保は志州^{じしゅう}国府の生れ。九鬼嘉隆の家臣、豊田七九郎の娘

で、民部がまだ秀吉の小姓をしていた頃、縁あって結ばれて十四年になる。

この古女房に、どうして関白が目をつけたのか、三十をすぎで、色香のあせた三保の何処がよかったのか。

秀次の奇矯な振舞は家臣たちも知っている。長屋うちへも入って来て、氣に入った娘たちを、連れ去って行く悪癖には、側近も眉をひそめた。

三保が、なぜ拒む事が出来なかったか。

主君であつても人道に反する過ちは許し難い。その日以後の民部は、三保を妻と思うことが出来なくなった。同じ家に住んでいるだけで、夫婦らしい暮しをしなかった。

相手が主君関白でも、他の男に肌を許した女を、妻と思うことが出来ず、表面を取りつくろうだけで、言葉を交わすことさえなかった。

無慈悲とは思つたがどうしようもない。一時はあきらめて忘れようとしたが、不幸はそれのみにとどまらず、三保は秀次の胤をやどした。

関白の迫姦が、一夜であつたのか二夜であつたのか、訊きもせず、三保もいわず、みごもつた事実だけが、夫婦の前にあつた。

悲しくいたましい夫婦だった。民部は主君を恨まず、妻をも責めず、苦渋な運命を甘受して、自分の子として育てる覚悟を決めていた。

男ではないように、女子が生れて来るように。せめてはそう

念じ、女子であれば他家へ渡せるが、男子であれば、嫡子として白井家を継がさねばならない。

女子であるようにと祈っている矢先に、今度の不幸が来てしまった。関白の自害は悲しかったが、三保の処置は楽になった。

関白が無事であれば、三保の産む子を我が子として、苦渋に耐えて育てねばならないが、秀次が世を去れば自から処置が変つて来る。

後命を待つ妻妾遺児の余命はなく、太閤は一人も許しはしないであらう。

と、すると、あるいは、三保の腹に宿った子が、この世に残すただ一人のお子かも知れない。

夫婦の悪夢は去つたが、腹の子の処置だけが残っている。愚かな主君だが、哀れな人ではあつた。

太閤と政所まんどら（秀吉の正妻）の間にはさまれて、死んで行つた不運な主君だ。

「別れの時が来たようだ」

妻の顔を見ずにいうと、三保はじいっと良人を見上げた。

「晴子様外、西御殿の女子供は、生き残る者がない」

「まさか」

「いや」

民部の声は低くなるばかりで、

「生き残る者はない。ただひとり、お前の体にやどつたお子だけは、誰も知らない」

「はい」

三保は首を垂れた。良人の口を通すたびに罪障がよみがえってくる。自分の罪ではないと思っても、男の体を受けとめた女の弱さが悲しくなる。

「関白にとってただ一人の遺児を、この世へ残したい」

声がまた低くなった。恩怨を越えて、最後の義務を果そうとするのだ。

「一時は、関白をもお前をも恨んだが、今となっては、やどした子供を喜ばねばならぬ。主人の血を、地上へ残したいと思う」

三保は、小机の上の鈴を見た。金色と銀色とが暗い中に光っている。

「輕輩に身をやつして城外へ逃れ、そなたの生国志摩へ戻って、その子を産んでくれぬか」

三保は答えなかった。

良人の意志も、関白の没義道も、空念仏に聞えている。

主君の血を残したいという声もそらざらしく、それが忠義というのなら、忠義ほど愚かなものはない。

彼女の心からは、愛情も忠節も消えている。彼女はあの夜の、あの一瞬を、救おうとすれば、出来ぬ事ではなかったと思っている。

良人民部は次の間にいた。

主君の暴虐を見のがして、それを忠義だと勘違いしている。あの時にもし、妻に襲いかかる男を切り下げていたら、あの

不幸はなかった。

切ったあとで、汚れなき妻と二人で死ねばよかった。

民部はそれをしなかった。

犯される妻を見逃してしまった。

「忠義とは愚かなもの」

と、その時から思い、良人への信頼を棄ててしまった。

然し、民部はその場にいなかったと主張する。在番日で、自宅へ戻る事の出来ぬ夜だったという。

女が身を守るのに、主君であらうと、誰であらうと、守りきれぬ筈はないともいった。

その争いが積み重なって、結論のつかぬままに、妊娠の不幸が来た。

「志摩は、九鬼一族以外、他国人の立ち入りを許さぬ場所と聞く。親たちの家へ帰って産んでくれぬか」

三保はうなずいたが、言葉には出さなかった。

産む事が女の業になっただけで、生れ出る子にも愛情はない。不運な子を産むだけの事だ。

「承知なればすぐに立て、今宵中に」

「今宵中に」

と、三保の顔は石蠟のようにかたい。不幸の日から、変わった事のない顔だ。

「中条五左衛門、坪内喜兵衛、山崎勘介の三人が供につく。亥の刻（午後十時）までには来る。支度して置け」

民部は供の武士も決めていた。五左衛門も喜兵衛も勘介も、

彼の取り立てた青年武士で、力の優れた者ばかりだ。

「すぐ支度せい。一刻の猶予もならぬ」

と、続けていった。猶予の出来ぬ危険は、聚楽第のどの部屋にも満ちている。

ひっそりとささやく声が、闇の中へ広がって、城も人も、死を待つように静かだ。

聚楽第の大城廓に、死の影がはい寄って行くように、民部も三保もその影に、ふかぶかと押し包まれている。

民部は、小机の上の鈴を手にとって、音のせぬように握りながら、

「早くせい」

と、うながした。

「はい」

と、立ちかけて三保は良人を見た。

「何かいうことがあるか」

「それも、後刻、申し上げます」

と、一礼して次の間へ退った。

支度は昨日からととのえてある。どんなことになっても驚かぬように用意して、着替えの衣類も布に包んで、紐で縛って置いた。

髪を長く垂らし、ぐるぐると無造作に巻き、下人の女房に見せかける形を造った。

紅白粉は昨日からさしていない。髪を巻き終ると、手甲をつ

け、脚絆をはき、すそを短くからげ、紐で縛った。

支度はそれで終った。

亥の刻にもう間もない。

五左衛門と、喜兵衛と勘介は下人部屋に集まっている。旅支度をして、暗い中に座って、口はきかない。

三保の支度が出来ると、三人は土間へ降りた。あたりは夜更けのようだった。

「一言、申し残しとうございます」

良人の前へ座って三保はいった。言葉の用意も出来ていて、「これにてお別れ致します。今生にての御対面はなりがたいと存じます」

「うむ」

対面どころか命はないに決っている。

「申し残すこととてございませぬが、今にして、自分の一生を振り返り、これが女の道であろうかと、つくづく思わずには居られませぬ。このようなむごい運命が、我が身にふりかかるうとは、思いも及びませんでした。お別れに当って、思った通りを申し残して参ります」

用意の言葉がすらすらと出た。

「お子を産みましても自分では育てませぬゆえ、お許し下さいまし。不運にして殿のお子のみごもり、あなたからはうとまれ、胸のふさがることばかりでしたが、生れた子は、藁の上から他家へ移し、無縁の者といたします」

意外に強い声だった。

民部は、白い硬い妻の顔を、ほのかな光の中に見た。愛情はなくなったが、余情はあった。

「志摩の家へも、白井の妻としてはもどきませぬゆえ、もし、御一命を長らえることがございましたも、お訪ね下さいませんように。縁なき者と思召し下さいまし」

それものはつきりいった。

民部は一つ一つうなずいた。

総て満足で、不服はない。望みを失った今は異議をさしはさむ要もない。

「さらに申し残します」

と、白い顔をきつと上げたが、その瞬間、美しいと思った。

生き返った妻の顔を見たような気がした。

「子供を産み落し、その処置を終りましたるあとは、他家へ再嫁いたしまするゆえ、御承知置き願ひとうございます」

民部はにこりと笑った。

無意識に湧く微笑だった。自分の気づかぬうちに、笑いが顔へ浮んだのだ。

三保が、これほど立派に美しく見えたこともない。心にも、構えにも、隙がない。

「生れたお子を、関白の血と思いたくございません。あなたには、殿様の御最期が悲しゅうございましょうと、わたくしには喜ばしい結末です。あなたには御主君でも、わたくしには許しがないかたきです。憎んでも憎んでも飽き足りません」

と、声が高まって行く。部屋の外へも、流れ出して行くよう

に、

「思えばわたくしは、あなたの妻となって、身に添える仕合せのうちに、不平も疑いもなく、女の幸いと信じて生きて参りました。そのわたくしを、関白は無残に踏みじったのです。女の誇りも、女の仕合せも。あの時を境にしてわたくしは、別な女になりました。白井民部の妻ではなく、ただのつまらぬ女に戻って、土の上へ放り出されました。それまでは造られた妻でしたが、あの時から、人間である自分に返りました。憎みてもあまりある、男の胤をやどさねばならぬ女の不運を、どうすればよいのか」

と、ほとばしるような声、人妻ではなく、女に戻った強い語気が、民部を目がけてたたきつけているようだ。

「一番望ましいのは死です。死は一切を無に返します。関白の罪も、あなたの不運も、わたくしの不幸も、みんな消えてしまいます。幾度か死のうと思いましたが、死は敗北を意味し、関白にもあなたにも、負けて行く意味で、身に受けた、限りなき不幸の救える時がありません。改めて生きる覚悟を定めまして。新しく生きて、関白へもあなたへも、復讐を上げたい。生れ出す子を志摩の海へ投げ込んで、地上へ残さぬかも知れません」

「三保！」

初めて民部が口をひらいた。笑いが消えて、激しい怒りがこみ上げている。

「親を問うな。生れ来る者を我が子と思え」